

宮代町中寺遺跡発掘調査の概要

H12. 4. 26 河井伸一

はじめに

宮代町中寺遺跡は、宮代町の南東、字東の西光院から字金原に続く台地上に立地する。西光院の旧寺域である西神外、東神外内に位置し、中世戦国時代から百間の中心地であった。戦国時代には関東管領上杉氏や岩付太田氏・小田原北条氏の支配下であった鈴木雅楽助の知行地であった。

このように中寺遺跡は戦国時代の百間の領主であった鈴木雅楽助の後裔である鈴木氏宅に隣接する位置にあることが、本遺跡の性格を考える上で重要であると思われる。

1 鈴木雅楽助について

『新編武蔵国風土記』によると旧家治左衛門宅には戦国時代の古文書が伝来すると記されている。

- ① 元亀 3 年 (1572) 北条氏政印判状写 (改定着到之事)
- ② 天正 9 年 (1581) 北条氏政印判状写 (改定着到之事)
- ③ 天正 15 年 (1587) 北条氏房印判状写 (一手組但半役人足計可出)
- ④ 天正 18 年 (1590) 伊達房実判物

鈴木家は近世初頭から百間東村の名主を勤め、天明 4 年 (1784) 頃まで名主職にあったことが確認されている (宮代町折原家文書)。その後、江戸時代後期には名主職を免じられているようである。

2 発掘された遺構と遺物

今回の発掘調査により掘立柱建物跡が 2 棟以上、井戸 2 基、溝 2 基が検出された。出土遺物の主たる時代は 15 世紀後半から 18 世紀にかけてであり鈴木家が在地領主や百間東村の名主を勤めていた時代と一致する。

①第 2 号掘立柱建物跡

柱穴が 65 基検出された。複数の建物跡が重複する上、建て替えも行われたと推定される。Pt37・38、Pt 3、Pt11 などでは、掘形の中央に柱痕があり、その周りにロームブロックを多量に含む土と黒色土が交互に堆積し良く固められている状況が断面観察により明らかとなった。

柱痕又は柱当りが確認されたピットは Pt 3、4、10、11、20、22、35、49、52 と多い。いずれも角柱で Pt35 は 15cm 角、Pt22 は 18cm 角、Pt10 は 17cm 角である。Pt22 と Pt10、Pt は角柱の向きも同一であるため同じ建物の柱穴と推定される。ピットの新旧関係で判明しているものは Pt35 と Pt22 では Pt35 の方が新しい。

遺物は Pt31 で北宋銭の元祐通宝、鉄製品が Pt11 でカワラケ片、焙烙片、Pt15 で焙烙片、Pt25 でカワラケ片、Pt30 で 18 世紀代の焙烙、Pt34 で 17 世紀代の瀬戸美濃の皿、Pt35 で 16 世紀前半（大窯第 2 小期）の天目茶碗、17 世紀前半（登窯第 2 小期）の志野輪禿皿などが出土している。

明確に戦国時代の遺物が出土しているピットはない状況であるが包含層の遺物は 15 世紀後半から 17 世紀初頭にかけての遺物が多いことから、本遺構はこの時期におさまるのではないかと推定される。

②2号井戸

直径 2m を計る円形を呈する大型の井戸である。ローム面から垂直に落ち込み、中位でテラスをつくり、さらに垂直に落ち込む。テラスとほぼ同一面で板碑が検出されている。覆土上層では近世（17 世紀後半～18 世紀）の遺物が多く、下層では 17 世紀初頭を下る遺物の出土はなかった。

出土遺物は 16 世紀後半～17 世紀初頭の焙烙や板碑、中世の常滑の甕片などが出土している。

③包含層出土の遺物

I 瀬戸美濃

第 6 図 1・3 は縁釉皿で古瀬戸第 IV 期（15 世紀第 4 四半期）、2 は端反皿で大窯第 1 小期（15 世紀第 4 四半期）、4・6 は天目茶碗で大窯第 2 小期（16 世紀第 1 四半期）、5 は天目茶碗で大窯第 5 小期（16 世紀第 3 四半期）、9 は播鉢で大窯第 6 小期（16 世紀第 4 四半期）などが出土している。

II 青磁

第 7 図 1 は青磁皿で 1 点のみ出土している。

III 志戸呂

第 7 図 3～5 は播鉢で大窯第 7 小期（16 世紀第 4 四半期）並行の土器である。

IV 在地産

カワラケは第 7 図 14～17、播鉢は第 7 図 18～20 である。第 8 図は内耳土器で 1～2 は土鍋タイプである。1 の底部内面には成型時の指頭圧痕が残る。他遺物の関係から 16 世紀段階のものではないか。3～6 は焙烙タイプである。花崎城や葛西城で出土しているタイプに類似するが地藏院遺跡のありよう等と比較すると 17 世紀初頭と考えたほうが良いのではなかろうか。

3 まとめ

中寺遺跡から出土した遺物は 16 世紀～17 世紀初頭にかけてのものが多い。これらのことから、今回検出された遺構は本遺跡隣接地点に現在も所在する戦国時代の土豪鈴木雅楽助屋敷に伴うものと推定される。鈴木家は江戸時代後期に没落している事から元々は広範囲に屋敷地を構えていたのではなかろうか。現在の鈴木家宅は中世の土豪の

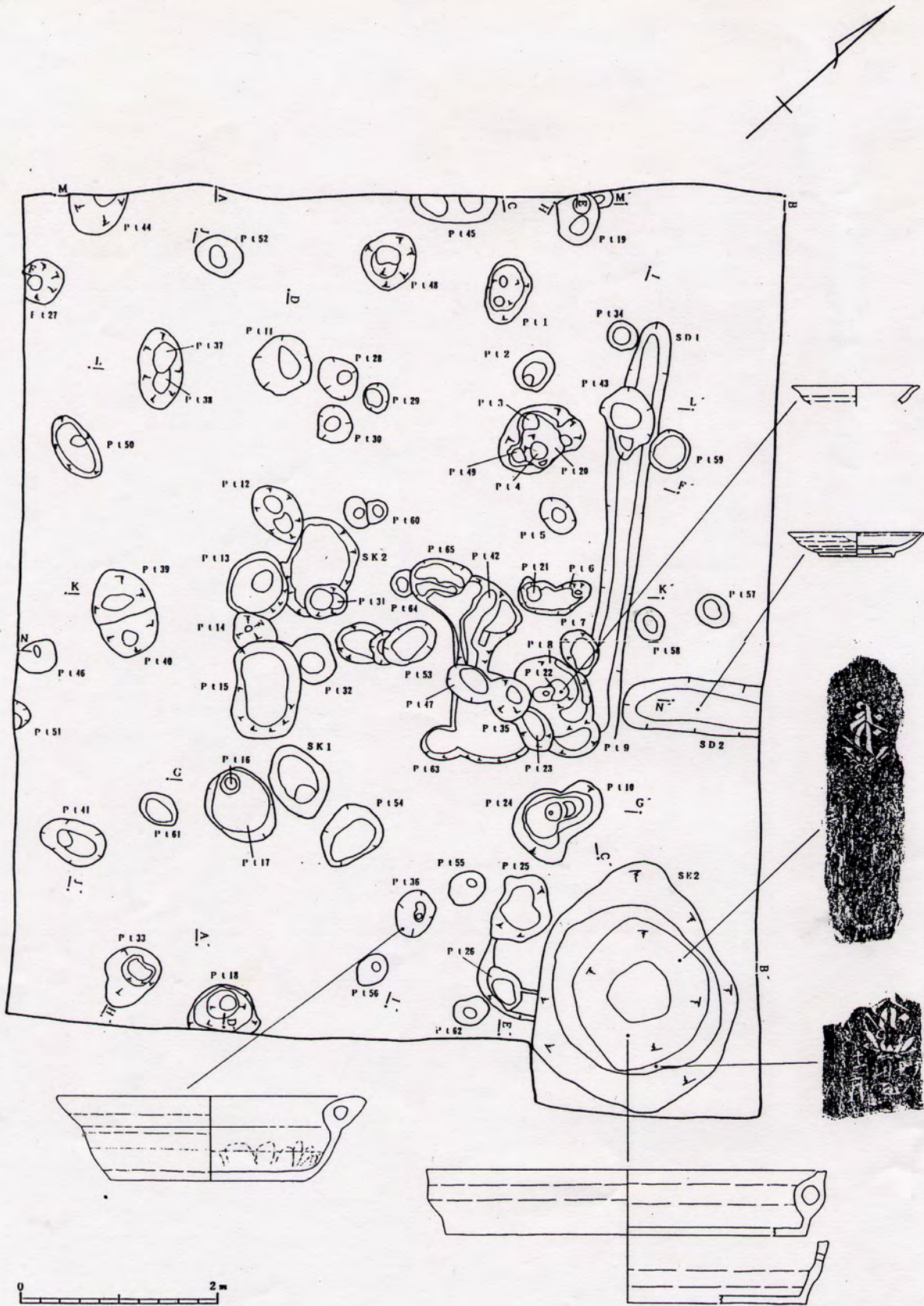
屋敷地とは思えない景観であることも元々は堀に囲まれた広範囲に屋敷地が存在した証ではなかろうか。

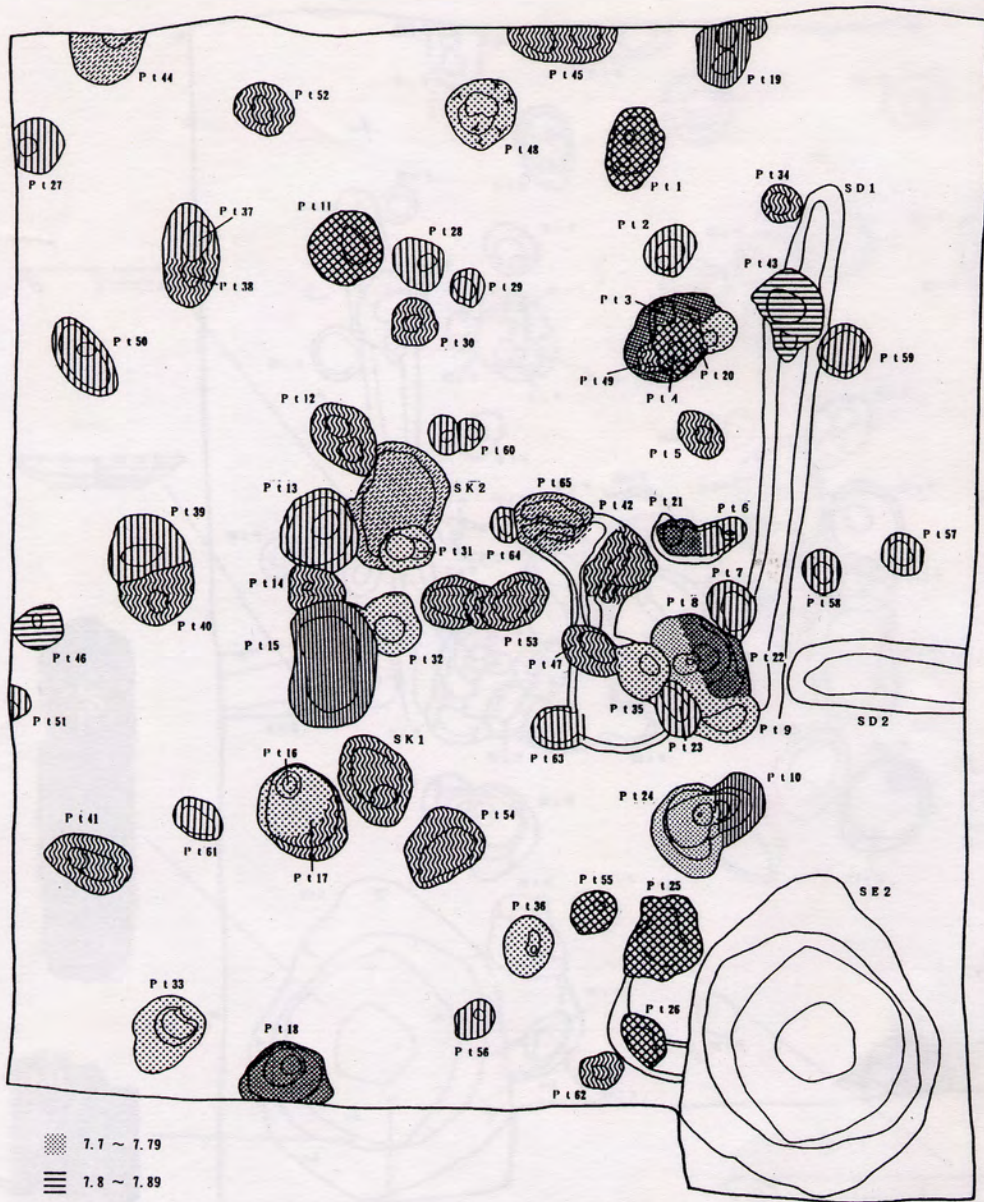
中寺遺跡で出土した内耳鍋は今年2月に試掘調査が行われた伝承旗本服部氏陣屋跡の南側の溝から出土した内耳鍋に類似している。今後、地藏院遺跡で出土した内耳鍋や焙烙などとともに内耳土器を考えていきたいと思う。

(参考資料)

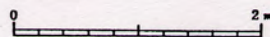
- 第9図1 地藏院遺跡第4号溝出土 内耳鍋
- 第9図2 地藏院遺跡第1号溝出土 焙烙
- 第9図3 地藏院遺跡第1号溝出土 焙烙
- 第9図4 伝承旗本服部氏陣屋跡第2号溝出土 内耳鍋
- 第9図5 伝承旗本服部氏陣屋跡第3号溝出土 内耳鍋



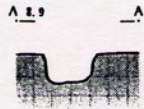
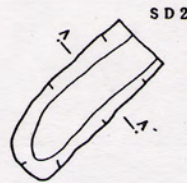
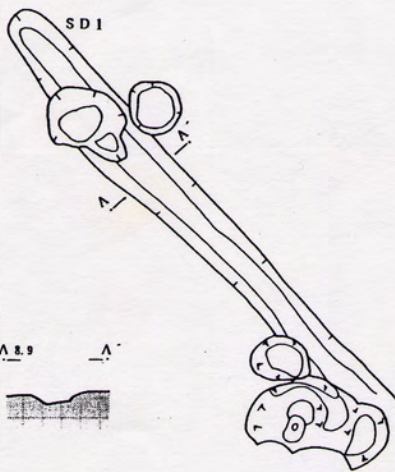
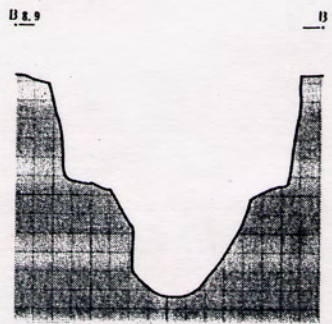
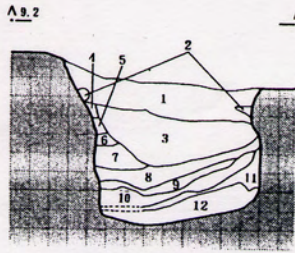
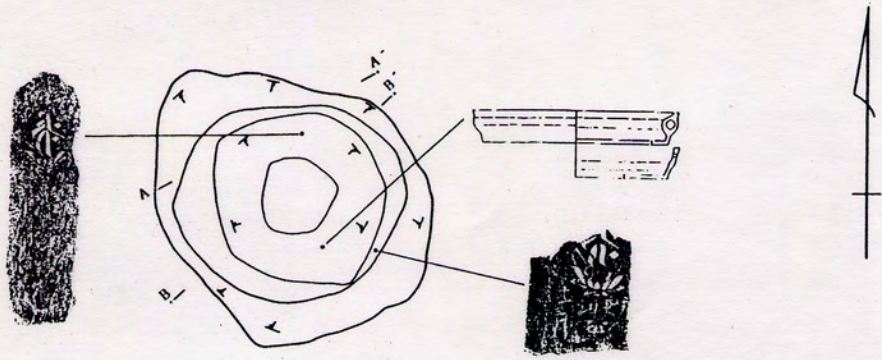


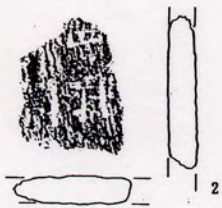


- 7.7 ~ 7.79
- 7.8 ~ 7.89
- 7.9 ~ 7.99
- 8.0 ~ 8.09
- 8.1 ~ 8.19
- 8.2 ~ 8.29
- 8.3 ~ 8.39
- 8.4 ~ 8.49
- 8.5 ~

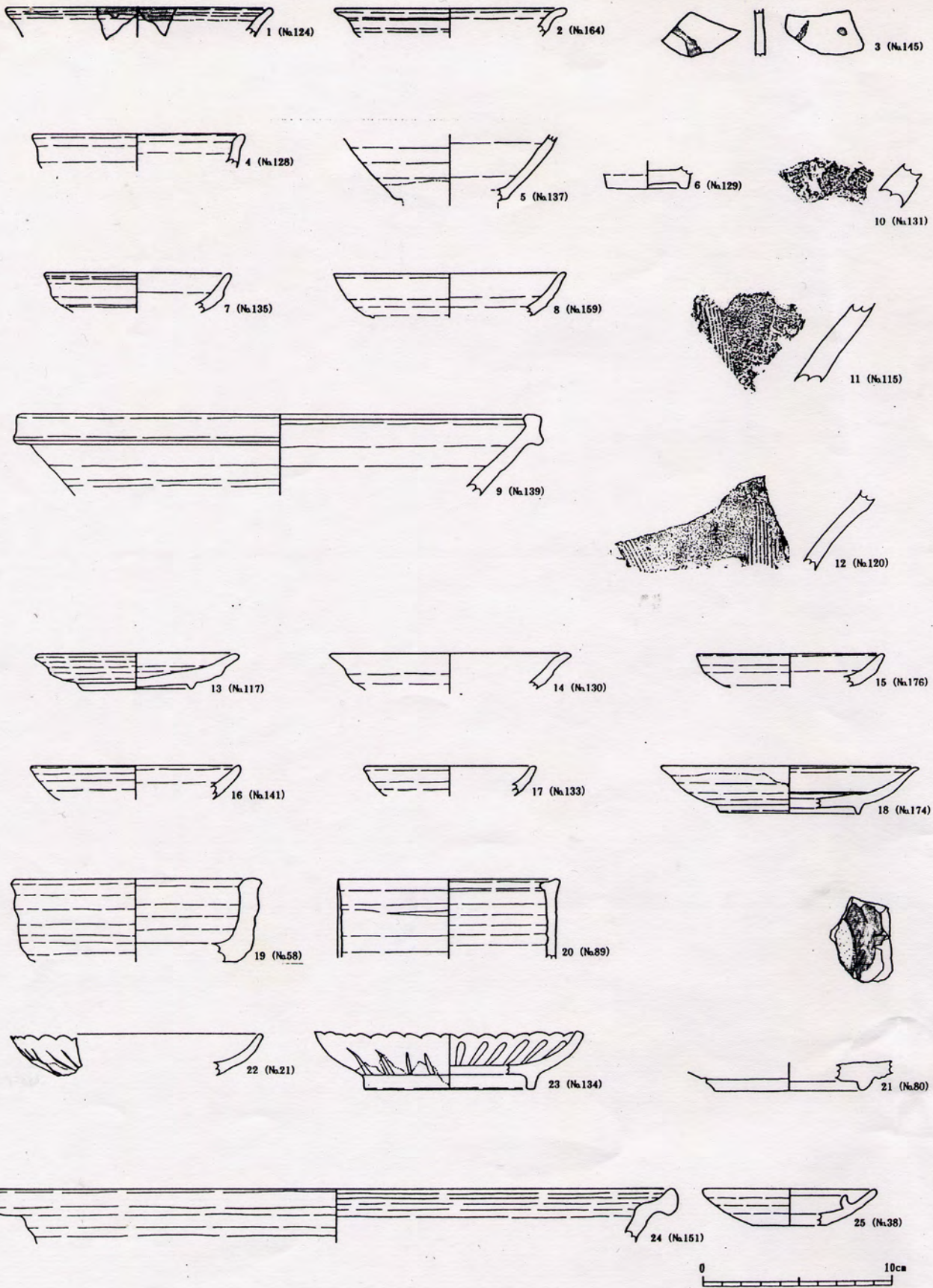


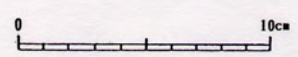
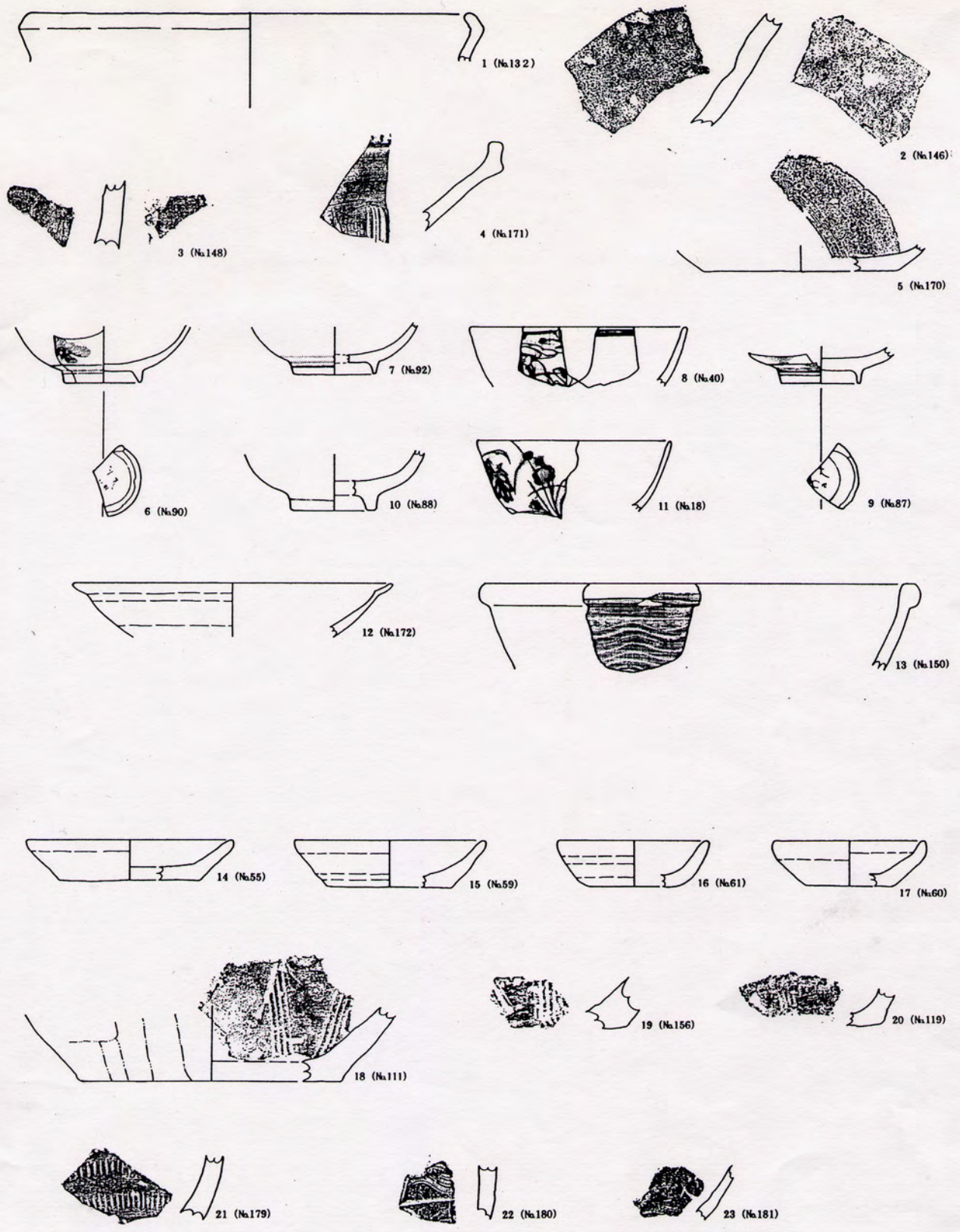
SE 2

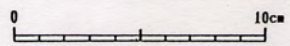
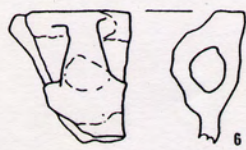
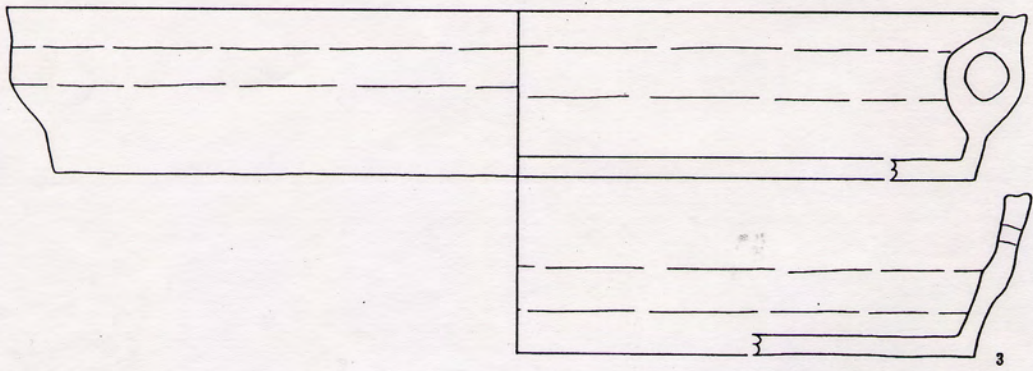
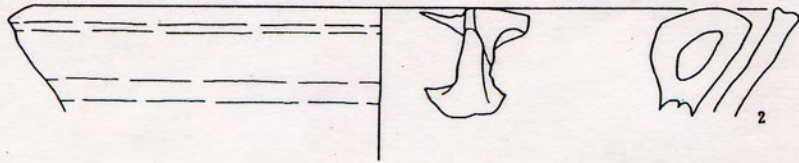
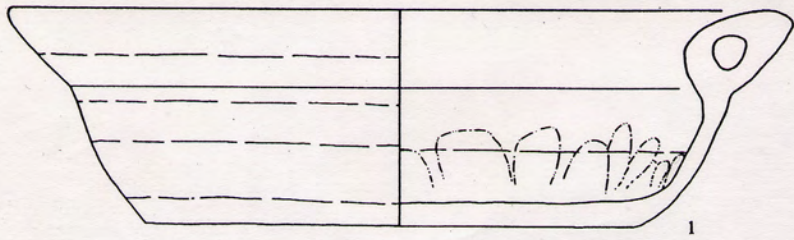


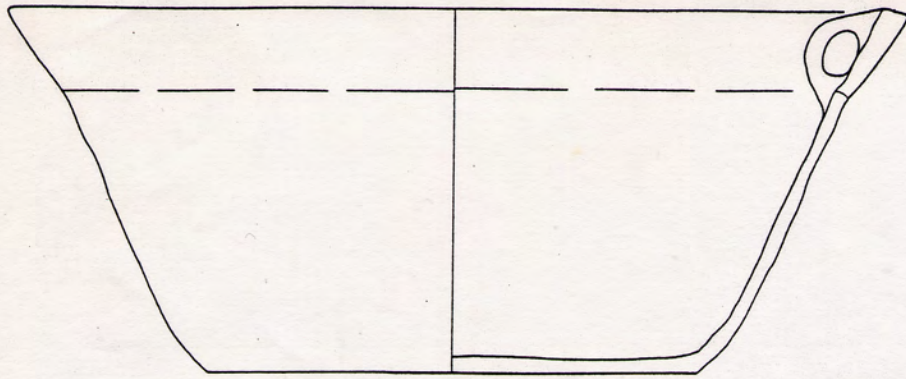


0 10 cm



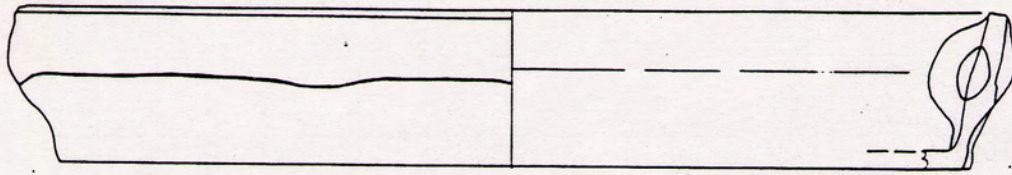




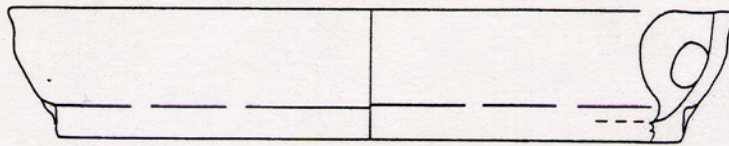


1.

SD4

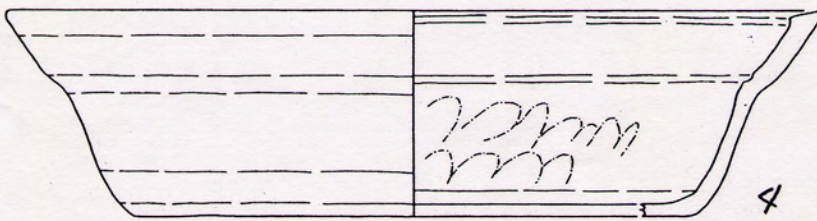


2

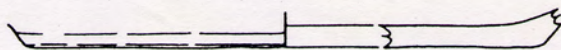


3

SD1



4



5

